

声と魂：情報と知識の自然

Resonance across the universe

村主 朋 英*

Tomohide MURANUSHI

要 旨

本稿は、情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であると見なした上でそれを「ひと」と呼びかえ、ことば（情報・知識）がひとを取り巻いていると見なす考えを基盤に置く。これまでに、ひとを取り巻くことばの総体を概念化して巨視的な像を構築するとともに、個々のひとの認知機構に関する微視的な像を形成してきた。今回は、ひととひとの間でことばが伝達・共有される機構の説明に取り組み、その帰結を踏まえて本稿を含む一連の研究における世界観を再構築し、最後に人間（ひと）と情報・知識（ことば）によって構成される自然を素描した。

キーワード：情報学の基礎 情報学的コスモロジー

1. はじめに

1.1 ものおと

永く光を系外に求めた末に熱源の帯同を知り、蒸雲が舞いのぼる。しかしそれが天に到達することはない。虚空中で冷やされ、あえなく雨となって地上に降り戻る。降水は地表を潤すこともなく何処かへと消え、陸地に沙漠が広がる。やがて再び、上空を赤黒い闇が覆うことになる。

背を丸め臥していると、ものおとが聞こえてきた。かすかながら、とぎれず続く。強まっては引き、下がれば上がるそれは、波動のようでもある。見上げれば、天空のそこかしこで脈音が響いている。それらは時に呼応し、しばしば諍い、しかしいつかどこかで折り合うようだ。波が押せば、別の波が打ち消す。大きな波が来ても、小刻みに別の波が重なって整え、おしなべて、可もなく不可もなく収まりゆく。

いつしか、日が頭上にある。それも間もなく傾き去るだろうが、しばらく後にはまた昇り来る。ああ、ひょっとしたら、その反復が鼓動を生じているのかもしれない。光熱ではなく、そうした巡りに鍵があるのかもしれない。

1.2 なぜなにを

本稿は、情報学と人間との関係再構築を目的とする一連の論稿(村主, 2010～2015)を引き継ぐものである。一連の論稿は、情報学の世界観の中核はひと（思考する自我）であり、それを「ことば」が取り巻くという考えを起点とする。各論稿ではそれぞれ、主としてそれに先立つ論考の展開過程で問題群を同定し、検討材料か

* 愛知淑徳大学人間情報学部 muransky@asu.aasa.ac.jp

媒介となる解の助力を得ながら、解を探ってきた。

前稿（村主，2015）では、特に、「解くこと」を解こうとした。ことばに関わる枢要な点であるとともに、論考自体の方法に言及するという問題設定であった。その過程で、ひとの直面することにはむらがあるという考えから、「かたち」という概念を得た。ことはひとを取り巻く偏りの変化であると規定した上で、偏りが集中するとともに、高い頻度で現れる偏り、いわば偏りの偏りをかたちと呼んだ。中でも、常にひとに帯同するかたちがあると認められるので、それを特に「身」と呼ぶことにした。

ひとは身を通じてことを見とめる（ことは身の異変である）一方で、身を通じてことをなす（「報」解）。そうしてひとは、身をはさんで他のひとと隔絶しながら、身を通じて他のひとと接することになる。この理解に基づけば、身の先、ことの織りなす模様のかなたに他のひとを認めることができる（「情」解）。

ことのかなたには他のひとの保持することばの塊があり、それが報いの基となる。そうした動きの単位となるかたち（偏りの偏り）は他のひとの身ということになる。前稿では回避したが、これは「もの」という語で表すことが程よい概念である。物理的な固形物を想像しないようにさえすれば良いだろう。

このように前稿では、「身」の概念を経て「ものの（再）発見」と呼ぶべき解へと到達した。一方で主目的の「解くこと」については工程が半ばである。

本稿では前稿の課題を引き継ぎ、解くことに関する解を求めてこれまでの解の延伸・拡張を図る。特に、ことばの流通可能性（個の領域にとどまらない）、およびそれに伴う展解に焦点を当てる。

1.3 どのように

一連の論稿（村主，2010～2015）を継承し、用語法の操作による概念の形成・整形とそれによる解の導出を方法とする。

既存の学術用語による制約を警戒し、時として、あえて日用語（自然語）を使用することがある。また、可能な場合には、漢字語などの移入語彙を避けて日本語固有の語形や音を選択する。

2. 問い

前稿（村主，2015）で導入した「報」「情」ふたつの語は、解くことに関する探求の媒解と位置付けられる。これらの語は「身」の概念に伴って得られた。

ひとは身に囲まれ、種々のことの降りかかる中で、偏りを溜める。その偏りは特有の傾きを生じ、ことをなす。それがしばしば身を通貫し、他のひとの身においてことを生ずる。前稿において、この過程を「報い」と呼んだ。

報いの介在によってひととひとの間で干渉が生じ、その結果、新たな状へと遷移する。時には互いの傾きが完全に正面衝突し、どちらか（あるいは双方）の傾きが大きく阻害され、場合によってはその身を滅する結果へと至るかもしれないが、それを含め、双方の傾きの組み合わせに基づき、しかるべき結果へと収束する。

ところが、後退や迂回など、そのなりゆきをかえるような新たな報いが生ずることがある。そこでは「情」、つまり他のひとを見とめる能が関与し、身の異変をもとに身に交接するものとその偏り・傾きを量り、それを通じて報いの傾きをかえるのである。それによって、破壊・破滅がある程度回避され、片方または双方の身の安寧が一定範囲で確保される。

前稿では、他のひとを見るよう「目をひらく」ことの重要性に関連してこの語を導入した。それゆえ、常に相手に道を譲るような「なさけ」（厚情）に限るべきではない。目をひらき、相手（他のひと）を見た上で適切・妥当な判断のもとでことをなす事態も想定されるから、時に「非情な」応対となることもあろう。つまり、冷情もまた情であると見た方が通用範囲が広く有効である。そしてまた、どうにもならぬ時に結果を受け入れることも、情のなせるわざと見てよいかもしれない。

ひとびとは、情を通じて折り合う。常に互いに情をもって向き合うものでもなかろうが、報いと情はその仕組みの上で往復運動のように交替ではたらくから、多くの場合、少なくとも一方が情を行使して（「目を開いて」他のひとを見とめ、折り合いを図る。すべての参加者が同時に目を閉じて衝突したとしても、続く時間において、誰かがいずれ目を開くことになるはずだ。情が介在する限り大過はなく、起・伏を繰り返しながらも、均衡を保つことだろう。

しかし、ひとびとの実際の交通においてはそうと限らないようである。特定の傾きを固持して報いを継続し（自らの意志の貫徹を図り）、相手の傾きの基盤となる偏り自体をも否認するかのような相剋がしばしば観測される。

このような、折り合いを妨げる不合理な選択を第四論稿（村主、2013）で凝りと名付け、概念化した。またその際、凝りを「ことばの病」であると解いたが、それならば、上記のような事態はことば、つまり各々のひとの基盤となる傾き・偏りの違いに起因するのだろうか。

前稿（村主、2015）では、ことばはひとの（個の）支配域に封じ込められていると解いた。おびただしい量のことばがひとを取り巻くものの、無限の広がりの中にことばが散在するわけではない。呼び出せばすぐ応えるから、常に自らの帯同する範囲にとどまる。さまざまなことばが混在するようだが、いずれも「わかることば」ばかりであり、結局のところそれらはすべて「自分のことば」である。

ひとは身を介在するために報と情の能を帯びるから、身は、他のひとと交わらずに接する境界領域である。個々のひとのことばは身の中に蓄えられ、身によって他と隔絶される。報いの応酬のなかで身が損壊する時、ひとも損壊するかもしれないが、そこでそのことばの偏りが否定されるものでもない。封じ込められているというより、その傾きが身にくままれて保護される。その身の制約から、ひとびとは、それぞれ固有の傾きを持つことになる。互いの身をはさんで隔絶し、自らの固有の傾きを抱卵するように秘匿するため、折り合ったとしてもなお、そうした差異が固定されることになる。身の違いに基づき、身の傾きという点で衝突することはありそうだが、互いのことばの偏りの様態がわからない以上、ことばの違いによって諍いを起こすことはないことだろう。互いのことばを罵倒し否定するようなことはないことだろう。

こうして、ことばを秘匿する限り、イノセントな報いをなす一方、ピュアな情を示して折り合うことができる。むしろ、異なるからこそ折り合うとも言えるかもしれない。同じ傾きゆえに競合するということもありそうだからである。それなのに凝りが生じて容易に折り合わないということは、単にことばが異なるというだけでなく、別の要因が介在することになる。

ひとが凝ると、状況にかかわらず特定の傾きを堅持する。つまり情のはたらきが妨げられ、適切なことばを選択して報いることができない。選択肢に関する制約（語彙の貧困）もしばしば要因となるだろうが、それだけなら、相手を見てさえいれば傾きをかえることができる。凝りは「あえて特定のことに固着することにより世界をかえないようにする」ことである。したがってことばの貧富にかかわらず、選択肢を切除しているわけであり、そしてその前にまず、他のことばを察知し（時には予定し）、それと異なることばを（時にあらかじめ）選択しているのではなかろうか。

そうなると、身の（「もの」としての）傾きの衝突というより、原理の対立・相剋である。いわば、ことばどうしの闘いであり、本来であれば相手を見て折り合うところで情の薄い行為を重ねるのは、何らかの経緯で他のひとの（異質な）ことばが視界を覆い、かわりにものが見えなくなっているからだろう。ならば、ことばが「通じている」からこそ、凝りが生ずる。ことばがひとの個の領分から漏出し、ひととひとの間の領域で交錯していることになる。

もっとも、それは必ずしも悪いことではないのかもしれない。

情の完全な支配下においては、たとえ破滅的な衝突が生ずるとしても矛盾と呼べる事態は生じない。ひとびとの偏りが互いに正反異なる命題を含んでいても、身を通して露頭することはなく、それゆえ字義通りの矛盾は生じ得ない。しかしそのかわり、個々の領域に偏りが散逸したまま、対立の解消も克服も起こりえず、総体

における矛盾が保全されることになる。相互に折り合うことを通じ、時にはそれぞれのひとのことばがかわることだろうが、それはそれぞれの固有の時間の中でなされるのであり、共有の場で協同によってなされるわけではない。情を行使したとしても、折り合うというだけで、協業することはない。自分の世界から出ることなく、異なることばを抱えたままに相対する。私は私、我は我で、溶け合わない。折り合うが、溶け合わない。

そう、そこが鍵ではないか。何も、凝りたいがためにことばをともにするわけではないだろう。身とそれに基づく報・情による幸福な支配を脱し、凝りという宿業を背負うのと引き換えに、身の外、ひととひとの間の(ものの)領域に個々の偏りが滲出し、矛盾を露頭させ、それによって協調・協行の工程が開かれるということかもしれない。

しかしそれにしても、見渡しても他のことばは見えない。確かに、違和感をおぼえることばが少なからず周囲に漂っている。しかし、純粋に他のひとのことばが見えることはない。特に、情を行使して目を開けば、ものを見とめ、その傾きを受け入れられるかわりに、一層、他者のことばが遠ざかる。したがって、相手のことばは、「見える」のではなく、何らかのかたちで「わたる」または「つたわる」ということなのだろう。

以上を踏まえ、次章では、まずことばに関する解を掘り下げる。

3. ことば

3.1 かたち

第四論稿(村主, 2013)では、「ひと(私)が凝る」という事態の理解のために「こと」「かた」の2語を導入した。このうち、ことについては、前稿(村主, 2015)において「身における異変」と解いた。一方、第四論稿でかたという語に託したのはおおむね「概念」に比定できる概念型であり、そこからいづれ観念・表象といった語と調合できそうである。さらに、ことばについて、かたをうつして形成されるとともに、かたを整形する「かたのかた」であると位置付けた。

かたは、ことの繰り返しを見とめることによって形成され、かたのかたはそうしてできたかたにおいて繰り返しを覚えると形成される。その工程(なれる, 順応する)を繰り返すうちに、自らに帯同する身と他の身(もの)を見出すことになる。ものがいくつか見えれば、より規模の大きいことが容易に捉えられるようになるだろう。すなわち、いくつかのかたの連なりにより、種々のことがわかるようになる。

前稿の解を延伸し、そのように二次的に見とめられる(大規模な)ことを「なり」と呼んでおこう。いくつかのことの連鎖(ことの成り行き)のほか、ものの構造(成り立ち)や姿形(なり)も、視点を移すことによって順次認められる(時間の推移に置き換えて捉えられる)ことから、同種のことばがらだと見なすことができる。次に、ことのなりを見とめることによってできた(一連の)かたを保存する過程を「ならう」と呼ぶことにしよう。

それらのかたの間につながり(みち)を有するかたのセットが(前稿で導入した)「かたち」であり、ひとは、それによってものを見とめ、さらに他のひとの介在を推定することができる。また、かたちを保存する(ならう)際には、レレヴァントな一群のかたのかたの間にある種の経路(連動するための仕掛け)が形成されるようである。

さて、こうして整形されたかたのかたによって、なり(ことの連なり)を繰り返し見とめることができるようになる。次に同様のことに直面した時にも驚かずに馴染むだろうし、成り行きが予測できる(わかる)ようなこともあるだろう。これが「解く」営為の初歩段階ではなかろうか。すると「解く」とは、かたのかた(ことば)をかたに当てて整形し、それを通してかたをことに合わせる工程だと言えそうである。

ことに接し、「解こう」としてことばを求める。何らかのことばが見つかるだろうが、すぐには整合しないかもしれない。再度求めると、まもなく、ことに合うかたが得られることもあろうし、妥当なこたえをつくるようにことばを整形する必要が生ずるかもしれない。ともあれ、呼べば返す、あるいは問えば応答する。ひと

のことばは、そのような交渉過程に組み込まれるようだ。

多くの場合、同語反復(こだまのような)ではなく、別のことばが返る。いわば入角と異なる反射であるが、乱反射などではなく、一定のかたを別の特定のかたへと置き換えるようなことばが返される。つまりことばの機構は、解(こたえ)を導くために「かわり」を返す機能を帯びるのだろう。

種々のことを解こうと取り組むうち、さまざまなかたが見出され、そしてそれがことばの機構に「反射角」(変換機構)として刻み込まれる。おのおのの身の位置・制約、それからすでに有することばの傾きに応じ、やがて特有の偏りのあることばの収蔵体が形成される。そうしてひとは、それぞれ固有のことばを帯同し、その固有の傾きをもって報いをなす(身を通して他のひとと接触・干渉し、ことをなす)ことになる。

3.2 名

前節および前稿を通じ、「解くべきこと」のうちに、「姿形」「なりたち」「なりゆき」という傾きの異なる種類を見とめることができた。いずれにおいても、「なり」を解いておぼえる(ならう)工程が前提となる。ならった成果を蓄積すれば、別の世界における「解き」に寄与する。すなわち、その世界の現状または後刻における身の異変を予見し、問題の質・量に応じて解決を進めることができる。

解決とは身の異変が落ち着き、世界が平穏・安寧な状態へとかわることだが、その際の「解きかた」についても、「なれる」「なす」というふたつの様式が見とめられる。なれる(なりゆきやなりたちに従う)という解きかたがむしろ平穏・安寧ではないと見とめられる場合は、それと異なる状態となるように「なす」(身を突き動かす)ことになる。なすという解きかたを行使するには、他にも付随してならっておくべきことが多いようで、また基本的に、やみくもになすものではなく、なりゆきを逐次よく見まもりながら(そのためには情と報のふたつの手綱をうまく操って)、最終的な最適解(問いに合うこたえ)を追求することになる。

それでもなお(あるいはそれだけの労が必要であるから)、なしてもならない時がある。あるいはそれ以前に、解きかた自体が見つからないこともあるだろう。本来はそこであらためて「なれる」ことになる(結果を甘んじて享けるしかない)が、そのひとの世界にとっては大異変が待っていることだろう。

そんな時しばしば、身が不用意に動くようだ。それは、身のうちの「かた」が勢い余って身に作用して生ずる、不合理な(ならったうちにはなく、何より、解くことに貢献しない)行為である。身の部位や身に付随する他のものに波及し、さまざまななりゆきが想定されるが、総じて代表的と思われる様態をとらえ、それを「鳴く」と呼んでみよう。泣き声や悲鳴のほか、さえずるような啼き声を含め、発声・発音行動が全般に解決から遠いようだからである。

それにより、まずは、「叫べば誰かが助けてくれる」「泣けば何とかしてもらえる」と期待することができる。しかし(それも悪くないとは思いますが)、当然ながら特定の条件下において有効というだけだし、何よりも、単にひとつの有望な解決策である。「鳴くこと」の真価は、解決策として無用である場合、どうにもならない場合にこそ認められる。選択肢がない、あるいは自分の学習・経験の範囲では策がわからない(もちろん、鳴くことによっても助けてもらえない)以上、模索を中断するしかない。それによって、問題が保留されること、その点に期待できる。

解くことができないことに直面し、「鳴いて」取り組みをいったん抛棄する。その後、時間を置いて後から解決策が見つかる(ことのがなりがわかる)かもしれないし、さまざまな策をつなげて解くという迂回の効用も期待できる。いずれにせよ、近い範囲のこと以外が連鎖して解決を導き、そしてそれを「鳴くこと」が仲介している。また、その音をそのこと(問題、問い)と連ね、ならい(経験、ことば)に組み込んでおけば、やがてこたえが得られた際にはそれをも連ね、全体を過程としてつなぎあわせることができる。

そのような鳴き声(音声に限らずその他の手段でもよい)を見とめてできるかたのかたを「名」と呼んでみよう。すると、名の音は、その由来となることを見とめると喚起されるとともに、その音がそのこと(解決できなかったこと)に関するおぼえ(かたのかた)を呼び出す鍵として機能する。それだけではなく、本来はか

け離れたこと（見とめうる「なり」の中ではつながらないこと）に関することば同士をつなぎ、融通無碍ともいえる中間子となる。いくつかの名を用いれば、長大な過程を管理し、大規模で複雑な問題を解くことも可能となる。

3.3 かたり

「鳴き」は行為（なし）の一種であるから、名をもとに身を通して報いを外（ものの領域）へと投じ、他のひとの身においてことを生ずることができる。それゆえ、名のみを連ねたことばであれば、ひととひとの間で移転できるかもしれない。それが可能ならば、互いにかたを共有する、つまりことばのなりを共通して享受する、あるいはかたちを供与するといった事態が期待される。そこで、名を連ねるように鳴くことを「かたる」と呼んでおきたい。

かたりは主に、解き終えた結果を伝える過程なのであろうが、名・鳴きの起源を顧慮すると、解けなかったこと（問い）に名を付けて織り込むこともできるはずである。その場合は、未解決の点を含んだまま「わかっていること」を移転することになり、その先の解は受けとめた側に委ねられる。名は個々のひとのことばを縦横無尽につなぐとともに、ひとの世界の境界を越えた連合を用意するわけである。

さてそれらのうち、結果を伝える（こたえを説いたり解き方を示唆したりする）という場合には、かたりが相手の労を節減するという効果を持つ。雑駁に言って、調べたり行って見てきたりといった労働を省くことができるし、推論を組み立てたり論法を整えたりといった工程においても、「一度考えたことは滑らかに考えられる」というような効用が認められる。

そのことはひととひととの関係に限らず、そもそもことば（かたのかた）が当人に対して供する効果でもあり、そしていずれにせよ、時間資源の問題である。かたりを流用する時に時間を節約できるなら、かたりを構成することは（あるいは、解くこと自体が）時間をことばに封じ込めることである。つまり、かたりを投与することは時間を分与することに等しい。また、受け取る側において語られたことばをもとに問題解決を図る時には、ことばに閉じ込められた時間が解放される、あるいは時間の進行が再開されることになる。一方、未解決分を織り込んだかたりにおいては、連携または協働による解決を図ることができる。つまり、解の共有とは時の共有である。

こうして、かたりはひととひとの間で互恵の関係を提供し、それによってひとびとをつなぐことになる。通交を重ねるうち、相互にことばが似通うこともありそうだし、おのおの欠けた点を縫い合わせることにより、総体としての活動が練り上げられていくものだろう。そのようにして得られる共通の傾き（傾向）を「のり」と呼んでみよう。そのような共通の傾向は、時には法ないし規約として作用するから、規範・典範といった語を用いて分析的に記述することができる。一方、動的な局面においては、流れや勢いといった語を援用して解くことも有効であろう。

いずれにせよ、「のり」はかたりによって構築される関係（ことばによる関係）である。ともに過ごすひとびとはのりを同じくし、また逆に、のりが通じ合えば、ひとびとは容易に友となることだろう。のりがともをつくり、ともはのりに依る。

こうして、ひととひととのあいだで共有世界を形成することができると解くことができた。それは個々のひとのそれぞれの世界を結び合わせたものであろうから、（小）宇宙と呼ぶことができる。この小宇宙は身を通じた相互干渉とは異質な連合関係であり、いわば語りの宇宙における同盟と言える。

しかしそれ以前に、かたりを通じてことば（かたのかた）を移転できるというのは、可能性に関する予測にすぎない。移転先にしかるべき受容機構がなければ、語りは単なるさえずりにすぎない（音以外の鳴きならば、なおさらわからない）。その点を解くために、ひとの側へとあらためて留意を転じてみよう。

4. ひと

4.1 声

受容に関する能については、ここまでに「情」という漢字語に依って概念を構成した。しかし、そこでいう情は、かたちを見とめてものを捉える（それを通じて、そこに介在する他のひとを顧慮する）という種の受容能である。また、相手が異質であるとは気づきながらも、「それはそれ」として折り合うと解される。そこで異質なことばを求めたとしても、バルバロイに取り囲まれる（つまり、自分のことば以外にことばが見えない）。したがって、それとは異なる、「目で見る」情に対比して「耳で聞く」ような受容工程をならいとる必要がある。

ここまでの解を延伸すれば、かたはまず、ひとの（ものの）内包することばに基づく報いである。ひとは帯同することば（かたのかた）によって事物の経緯や様態（ことのなり）を解く。それで得られたかたのかたを名だけで再形成し、それによるかたを鳴きとして投出したのがかたである。ならば、かたを受容するとは、他のひとの鳴きを見とめ捉えてかたのかたをつくり、それを適用してことを解く過程であると逆算できる。

鳴き自体は自分の身の側で検知した一群の異変（こと）であり、それがことばだと認定しない限りは（文字どおり）不可解であるが、それでいて／だからこそ興味深い事象である。そこで、他のひとが自分と同じようにことば（知性）を持つと考え、そのさえずりのような鳴き声をかたとして聞いてみよう。つまり、自分が日頃接する自分のことばと同じように受容する。そうしてかたりに仕込まれた「かたち」をならいとれば、ことのなりについて、それまで保持していた解（わかっていたこと）と違う解を得ることができるようになる。

もともと「目を開いてものを見る」情とそれに基づく報いだけでは解決しない時に鳴く（それによって語りが可能となる）わけであるから、語りの中には、常に、予期しないつながり（飛躍ないし断層）が含まれるだろう。それゆえ、知らないことを多く教えてくれるだろうが、一方で、時には不合理、無理・無茶なことも含まれ、総じて違和感をもたらす（自分の世界の中に違和感がある／おぼえのないことばが見られるのは、このような経緯であろう）。いずれにせよ、新たな／これまでわからなかったことを解くためのことば（あるいは、かたち）がこうして得られる。

この工程は、通常の世界と構図が少し異なるようである。帯同することばを基盤に身を仰ぎ、襲来する種々のことに目を向けるというのが常態のはずだが、そうではなく、ことば（かたのかた）を仰ぎ見ている。ことばを見てできるかたは、「かたのかたのかた」であり、その後、引き続いてことば（かたのかた）を整形する（新たなことばをならう）ことになる。

それは、ことを解くこととは截然と違う過程であり、「ものごとを見る過程をかえりみる」ことである。またそれゆえに、ことを見ようとする情のはたらきがこの工程においては停止され、その目は専らことばの領域に向けられることになる。それはすなわち、凝っている状態である。こうして、凝りがことばを育成・調整していることがわかる。（ちなみに、cognition に対し recognition という語に込められた概念型は、そのような解に関連するのかもしれない。「見る」の強勢ということから、「読む」という日本語を当てるのも一興かもしれない）

いずれにせよ、他のひとのかたりに聞き取ることは、自分の帯同することばの調整につながるとわかる。そうすると、かたりに通じて得られるのは、他のひとの個別のことばに関する解だけではなかろう。そのひとの（自分のそれとは違う）世界の、その基をなすことばの総体がわかる。ただ、そのような理解のためには、最初から、そうした異質なことばの総体をそのひとが持っていることと認め身構えて相対することが必要かもしれない。いささか面倒だが、しかしそうすれば、かたりに通し越え、（前節で導入した概念によるなら）異なるのり（範型, code）に接触することができるはずである。

さて、ここまでの解（とくに前稿の解）に基づけば、目を開いて見える世界はもののモザイクであり、その随所で他のひとが介在しているらしい。そしてそれぞれ固有のことばを持ち、報いを重ねている。つまり、こ

とはすべて誰か（ひと）の傾きの果てである。そこで以上のようにして「語りを聞こうと耳を傾ける」能を応用するなら、自分のことば／世界を脱し、その（ものごとの奥に潜む）他のひとびとのことばを認められる可能性が開かれているのではなからうか。

「もの」の傾きは、その奥にいるひとびとの偏りが波及していると推定される。「かたりをなしているひとびと（自分と同じようなひとたち）がことの向こうで各々固有のことばを保持しながら介在する」というヴィジョンは、上記の、かたりを聞こうとする工程の帰結解だから、同様に、ことのなり（態様）を手掛かりに、他のひとびとのことばを「読み取る」ことができるかもしれない。

つまり、全てのことは（客観的な自然法則に沿ってそうなるのではなく）誰か他のひとびと（人間とは限らぬ）のなし（行為）の波及であると見なし、その推移や構造（なり）がそれらひとびとによって構成されていると考えれば、その態様から、そこに投げ当てられたかた（意図や構想）を算出することができ、さらに範型となることば（かたのかた）をも推定できる。

そう解くならば、ことはおしなべて誰かの声である（ことはある種のことばである）と言える。少なくとも、「なし」も「なき」もそれぞれ周囲のものに波及し、そのうちひとびとの身を介してこととして見とめられる。そしてそれを見聞きするひとびとは、そこにかたち（ことの推移、ものの成立）を見る。（それは、「in + form」、つまり形を与えると解される情報の原義を想起させ、興味深い）

ひとびと（人間やヒトとは限らない）は、それぞれ固有のことばに立脚しながら、随時、何らかの声を発する。さまざまな種の声が交わされた結果、ひとびとの宇宙は、背景放射のように声で満たされる。それらが響き合い、声を通じてひととひとが（そして個々のことばどうしが）つながる一方、ひと（もの）それぞれのロゴスが混合・交錯し、その結果として、「部分的に均衡（秩序）を保持しながら総体として混沌」という状を見せているということなのだろう。

ひとの姿が、ようやく見えてきた。最後に、その像を描出する。

4.2 魂

ここまでの論考からいくつかの予解を導出し、それを手掛かりに記述を進めることにしよう。

前節で取り上げた「かたりを聞く」能は、情のはたらきを停止して凝りをもたらず一方、それ以上に（そして、おそらくそれゆえに）大きな受容の能をもたらず作用である。すなわち、ものを見とめるだけではなく、広範囲のかたりを受け入れ、またかたりの淵源となる他のひとのことばを推認することに寄与するから、これ自体がある種の情と言える。ということは、原初的な（生きものに自然に備わる）情に対し、二次的に獲得される情と位置付けるべきなのだろう。

この二次的な情においては凝りがポジティブに関与し、とくにことばの形成・整形を凝りが促進する役割が認められる。それ以前に、凝りはどうやら回避できない事態であり、ひとは凝っている状態と凝っていない（ひらいている）状態とを始終、往還している。その反復運動が解きの過程を有効に進める動因であるとも考えられる。

以上の予解からわかるのは、ひとには、こととことばそれぞれに振り向けられるふたつの方面があるということである。すると、こととことばに挟まれながらも双方から切り離されている中間地帯がひとの主領域であり、そしてそこがかたの形成される空間なのだろう。またそれが、ことを受けとめる（一次的な）情の主体となる。その領域はことばとも対置され、ひとがかたりを聞き取る二次的な情を行使してこと・ことばの両者を合わせる際のワークスペースとなる。なお、こととは身の異変であり、ひとはそれを解消するために（つまり身の平穏安寧を求めて）ことと合うようかたを整形する。ことばはその際に、「かたのかた」として有効に使役される。

この「領域」の半面は身で劃されており、そこでことが生ずることになる。前節では、かたりを代表とする「声」が聞かれると解いたが、本来聴覚に限定したわけではないから、音が聞こえるというよりも、少しずら

して「身に効く」という表現で捉える方がよいのかもしれない。ものが（あるいはそれを通して他のひとが）ひとの身に干渉し、その接触面をはじくように刺戟を与え、そうして生じた身の異変がかたの領域に鳴り響いて「こと」として見とめられるというところか。すると、かたの生成される領域は、空洞のような像で捉えることができる。ならば、かたはその空洞の宙空に生ずるひずみのようなものであろう。

この空洞のような領域を「こころ」と称してみようか。それに合わせ、かたという語を試みに「おもい」という語で言い換えた上で、情・報および解の機構の記述を進める。

ことに目を向けるうち、一定の繰り返しがあると気づいてその様態（パターン）を認めると、こころに思い（かた）が生じ、空洞の中を沈着していく。それが契機となって（問いとして）解きの過程が喚起される。すると、かたのかたがそれまでのなりに基づいて何らかのことばを返す。それがかたと符合するならば、符合したという思いが付加されてまた沈み、かたのかたを強化することだろう。符合しないことばが返っても、こととなり（変化・経緯、構造など）に見合うようなかたちを示すなら、問いと答えの組みが思いとして沈み、かたのかたを形成または整形する。答えのない問いがそのまま思いとして沈むこともあろうし、調和しない答えとセットで仮に保存されることもあるかもしれない。いずれにしても、こうして、こととことばとはさままれて思いが生じ、ことばとの応酬を経て選別され、複合し、組み換えられるなどしながらことばに刻印を残す。そのように捉えてみると、解の過程や、ことばの連合とおそらくそれに起因する想起パターンの変動などを円滑に記述することができそうだ。

そうして解の工程を繰り返すうち、ことばのストックに一定の偏りが生ずるのだろう。そしてそれが、問いに対する答えの傾向（3.1で「反射角」と呼んでみた事象）を形成するのだろう。また、そのような工程の途中または合間にことばに対して留意が向けられ、特定のことばに対する思いが沈めば、ことばが調整されることになる。そのようなことばに対する留意が凝りであり、ことへと向ける情を一時的に遮るものの、有効なことばを構築することができれば、後刻の解の過程を繰り返し促進し、効果的である。凝りがことばの偏りを形成・整形し、その偏りがものごとをよく解く。このような作業を繰り返せば、解が多く保存されてことばの「土壌」が豊かになり、その後の労（時間、エネルギー）の節減に通ずる。

かたりによってそのような解が他のひとに伝えられれば、のりが共有される。それが他の思考を助ける（労を節減する）とともに、ひとつをつなぎ合わせることだろう。それによって、ものの領域における傾きが同調することもあろうし、ことばを共有することによって、相互の世界が結合・融合してより大きな世界（小宇宙）を形成することになる。

ただ、かたは（名の特性ゆえに）しばしばものごとの様態と乖離し、また、とも（なかま）と溶け合う分だけ、ひとはとも以外のひとびとと先鋭的に対立する。なぜなら、ことばは偏る、あるいは偏りそれ自体であるからである。偏る分だけ選択されなかったことばがあるわけで、それゆえ、選択されなかった方のことばを保持するひとびとの間で矛盾関係となる。しかし、ことばの共有（およびそれによる協調）による便益は多くの場合、欠点を凌駕するから、ひとびとはしきりにかたを交わし、始終凝りを繰り返すことになる。そのうち、個の領域だけではなく、ことばをともにするひとびとの間で思いが共有され、共通の思いの蓄積が重力場のような領域（小宇宙）を構成する。

ひとびとが完全に溶け合うことも考えられないから、小宇宙をともにしていても、ひとはそれぞれ固有の重力場（思いの沈んだ先の積層）を保持することだろう。それは、こころを挟んで身の側とは反対の半面に位置するはずである。

そこには元来、情（一次的な）の淵源となる機構があったのかもしれない。しかし、ときどきの思いが沈み重なり、さまざまなかたちを見とめた結果としてかたのかたの連関（ことばの網の目）が縦横に巡るようになると、情をもたらすはずのその何かは覆い尽くされ、いずれ機能が麻痺することだろう。

それはやむをないことではあろうが、ものの領域を円滑に過ごすためには必要な（あるいは少なくとも有効な）能であるから、できるかぎり効力を保ちたいものである。ことば、とりわけ所属する小宇宙で共有される

のり（規範）にとらわれず、常によく目を開いてものを見るとともに耳をすませてひとの声を聞くこと、それによって、ことばとことの乖離が少なくなるようにところを整えることがよからう。

実のところ、そんな教訓を守らなくとも大過ないだろうが、自分がこのような（情報と知識で構成される）自然の中にいることを時々でも思い返すことができれば、ものごとの推移と自分の思いとの間で揺れ震える魂に多少なりとも安寧が訪れるはずである。

5. おわりに

5.1 まとめ

本稿は、情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。第一論稿（村主，2010）における措定（情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であるという仮定）を起点とし、思考する自我を「ひと」と呼びかえるとともに情報や知識を「ことば」と呼んだ上で「ことばがひとを取り巻く」と見なす世界観を基盤に置いている。

前稿までに、ひとを取り巻くことばの総体を概念化して巨視的な像を構築するとともに、個々のひとの認知機構に関する微視的な像を形成してきた（村主，2010～2015）。今回は、ひととひとの間でことばが伝達・共有される機構の説明に取り組み、その帰結を踏まえて本稿を含む一連の研究における世界観を再構築し、最後に人間（ひと）と情報・知識（ことば）によって構成される自然を素描した。

これで主要な課題をひととおり網羅することができたはずである。しかし、先を急いだために、不備や遺漏もありそうだ。今後、論証や引用・参照記述の付加などの作業も強く求められるだろうが、その前に（あるいはそのためにもまず）全工程の総括・補完を急ぎたい。

5.2 波濤の先に

この一連の論稿を展開するうち、ひととことばの宇宙を構成する素因子は偏りと傾きであるとわかってきた。それら（偏りや傾き）が作動して、宇宙の種々の事物・事象を構成するわけである。特に今回、傾きの波及や偏りの移動・転移が動的な過程を構成する一方、動因の滞留によって静的な事象が生ずることも認められた。一連の論稿において形成・整形した概念群は、軒並み、この観点のもとで集約・再構築することができると予想される。

そこで次稿では、その点に注力しながら、論点・着想の整理・統合を進める。

文 献

- 村主朋英 (2010). 情報学の中核にあるもの：根源からの再出発を企図して. 愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇. No. 35, pp. 123-134.
- 村主朋英 (2011). 情報の時空：われわれをとりまくもの. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇. No. 1, pp. 31-44.
- 村主朋英 (2012). 情報と矛盾：世界の構成. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇. No. 2, pp. 63-71.
- 村主朋英 (2013). こと・かた・ことば：情報の発生と伝達によせて. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇. No. 3, pp. 43-48.
- 村主朋英 (2014). 凝りと澱の地から：情報の蓄積・組織化をめぐる. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇. No. 4, pp. 37-46.
- 村主朋英 (2015). 報と情：ひととひとの間. 愛知淑徳大学論集 人間情報学部篇. No. 5, pp. 43-52.